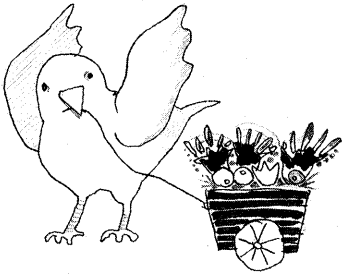
料理

松井　とし



母は料理の好きな人である。古稀を迎えた今も、旬の材料を生かした季節の料理を欠かさない。勿論、おせち料理もみな手作り。漬物から和洋菓子に至るまで、心をこめて料理する。今なおいろいろ工夫し、レパートリーを増やし続ける姿を見ていると、料理は真に創造的な営みだと思う。

そんな母の手作り料理、手作りおやつで育てられた私は、病弱で食べることに全く意欲を示さない子どもであった。ひどい偏食と食欲不振でいつもお腹いっぱいの私。食べることの幸せと感動を知らずにいた子ども時代の私は、人間として生きていなかったのではないだろうか。

食べる事に興味のなかった私は、母の台所へも近づこうとしなかった。料理を知らない

私だったが、自分のくらしを始め、台所に立ってみて愕然とさせられた。自分の中に、母の味、母の料理が厳然と存在している。見るともなく見ていた手際、聞くともなく耳に入っていた料理の手順や知識の断片である。自分で作るようになり、料理が楽しくなると、私は人が変わったように、食べることの好きな人間になった。

そして、幼稚園の子どもたちとの生活の中にも、作って食べる活動をたくさんとり入れた。ホットケーキ、スィートポテト、クッキー作りは恒例である。みんなで分かち合って食べるのは、本当に楽しみなことである。

その楽しみの根底には信頼関係がある。子どもたちは、砂場遊びやままごとの中で、さまざまな料理を作る。差し出されたごちそうを喜んで食べることで、その子どもと私の間に和やかな関わりが生まれる。「おいしい！」といって食べる私のしぐさを、子どもたちはニコニコと実にうれしそうに眺め入る。

食べるという行為は、相手を受け入れることである。ある料理をしながら、必ず特定の人を思うことがある。料理をしてくれた人の味や工夫、その場のひと言。料理は人から人へ伝わるもの。そして、人と人とのかかわり合いをうみ出す糧と言えるであろうか。

（神奈川県立教育センター）